

求道

第拾五卷
第壹號

二 月 號

■徹底したる平等主義

■宿業論——救異鈔十三章の精神

■國際的懺悔と宗教的自覺

大正八年三月十五日發行（毎月一頁十五日發行）

徹底したる平等主義

○講和会議を勸導して諸種國體を提起せしむる
世人の耳目の中心となり、あるは口實の爲に國體を
わが故と閑暇して之を區別撤廃せしむるは同故と
種々の問題が續々と解決されねばならぬ。而して國際

聯盟そのものも、ウキルンン亦はロイドデョーデの高
調せるデモクラシーそのものも、如何なる根據の下に
主張せらるゝものなりや。要するに漫然と唱道せらる
ゝ平等主義其者が、頗る徹底せざるの感がある。吾人は
信仰の立場より論じて見よう。

○人種區別撤廢の如き最も見安きの問題にして、而も
米國の如きは之に觸るゝことを避くることに腐心して
居るが如きは頗る怪むべきことである。此點に於ては
佛教本來の起源に於て最も徹底したる歴史を有して居
る。印度に於て婆羅門、刹帝利、吠舍、旃陀羅の四姓の別

始時代に於ては、使徒の中には猶太人間に傳道すべき
か、異邦人に傳道すべきか、兩派を生じたる位である。
ゆへに、佛教が婆羅門教の根柢を覆へして、眞の平等を
説きたると聊か趣を異にして居る。其異邦的基督教も
其人民を自由にしたといふよりも、寧ろ基督教を以て
精神的に征服したといふ趣がある。是が今日に至るま
で外國傳道のために、犠牲的精神の頗る感すべきもの
あるにも拘らず、其結果は異人種の征服の手段である
かの如き疑念を挿まるゝ所以である。

○既に故人となり少壯戰略家にして印度内地及び軍隊
を視察したる人が、如何にして英國將校が印度兵を指
揮するかを物語りたことがある。即ち印度のカストを利
用したものである。軍隊に於て印度婆羅門教の異宗異
派及其種族の別々なるものを、縦横に綱の目の如くに
組み合して隊を組織してある。故に一致團結して反抗
謀叛の出來ぬ様になつて居るのである。釋尊が平等主
義を説いたゝめに國家が亡びたなどいふことを臆面

によりて、カストなる階級制度が頑固に化石したやう
になりたる時に當りて、四河海に入りて同一鹹味なる
が如く、四姓同じく釋種と稱して同一涅槃の妙味を悟
り、眞個に和合圓融の教團を實現せられたのである。涅槃
經の言にも、諸佛世尊諸の衆生に於て、種、姓、老少、中
年、貧富、時節、日月、星宿、工巧、下賤、僮僕、婢使を觀そ
なはず、唯衆生の善心ある者を觀そなはず、若し善心
あれば便ち慈念したまふとある如きは、眞個に徹底し
たる平等主義を説かれたるものである。

○此點に於ては佛教のみならず、耶蘇教に於ても世界
的に平等を説かねばならぬ筈である。さるにも拘らず
事實に於ては人種區別の偏見は頗る多きは怪しむべき
ことである。本來基督教の起源は、猶太教の中よりして猶
太の神を世界的ならしめたが基督教ではあるが、併原
もなく推量するものがあるが、寧ろ佛教が盛んになり
て、婆羅門のカストが和融されたならば、四分五裂の印
度とはならんのであらう。併夫を利用して之を指揮
するといふ、基督教國の操縦も亦あまりに皮肉である。
○泰西思想の最も不徹底なる要點は自己を正義なりと
主張して、利己我利に陥ることを顧みざる點にある。國
際聯盟の如き實に今や其馬脚を露はし來りたものであ
る。ウキルンンが之を提唱したるときは、随分渴仰した
る人もあつた様であるが、實に目を醒ますべき時であ
る。全體日本の基督教者には米國育ちが多いやうであ
るが、頗る反省すべきである。

○米國大統領は國際聯盟を提唱しながら、頻りに人種
區別撤廢の提起せらるゝことを頗る係念しつゝありと
いふことは、正義人道の標榜に對して、甚だ恥づべき
ことである。此に於て自己が正義人道なりと標榜する
こと自身が既に誤謬である。況んや獨逸植民地の國際
管理を主張する如き、畢竟米國自身の利害を中心とし

て提唱せられたるものにして、眞に徹底せる平等主義とは稱せられぬのである。

◎眞個に徹底せる平等主義を實現せんとせば、先づ各自が我が正義なりと標榜するものが争論の源である、我執の端緒である。即ち個人が罪惡を自覺して懺悔するが如く、國際的にも懺悔があらねばならぬ次第である。此の如く争論せるものに對して、無諍の態度をとり、我執のものに對して無我の態度を以て飽まで悲愍したまふが絶對の大慈大悲である。親鸞聖人は慈悲の文字を専ら如來にのみ用ゐて、我等は小慈小悲もなき身にて、有情利益はちもふまじと慚愧したまひたのである。自己を以て正義なりと主張しつゝあるものが、國際聯盟を實現し得らるべき筈はない。此點に於ては泰西の思想に、根本的に缺陷があるといふことを、大に注意すべきである。

◎此徹底せる平等主義によりてこそ、所謂民本主義の眞髓を攫み得べきと考へる。親鸞聖人が人間の善惡、

速疾に無上正眞道を超證す、故に横超と曰ふなりとある。又和讃にも、如來清淨本願の、無生の生なりければ、本則三三の品なれど、一二もかはることぞなきとあるが是である。

◎近時思想問題に於て、世界主義とか、四海同朋とか、平等主義とかを唱ふるときは、結局個人主義になりて、統一思想を缺くといふが如き感がある。是畢竟四海兄弟ならしむる根據そのものがないからである。然るに一切善惡の我等を同一佛子として悲愍したまへる大悲大願に遇ふことによりて、同一醜味の眞如門に融和するといふ統一が自然に來るのである。近時唱へらるゝ思想統一なるものは、木に竹を接ぐが如く、不自然なる律法的強制なるが故に、何の益なきのみならず、各自の自由を勦絶さるゝ虞がある。之に反して近時頻りに頭を擡げ來る民本主義は、或は各自の自由に放任して、遂に收拾すべからざる憾がある。然るに聖人の同朋主義は、一面に於て一切の善惡區別を廻へして自由平等

根機の利鈍に拘はらず、唯如來の誓願の下に、御同朋御同行として、四海兄弟を説かれたるが如きは、實に徹底せる平等主義である。凡聖逆誘濟しく廻入すれば、衆水の海に入て一味なるが如しと説かれたるは、原始佛敎が四河海に入りて同一醜味なるが如く、四姓佛門に入りて同一釋種と稱した精神の復興と稱すべきである。此點につきて親鸞聖人の平等主義の根據を、明瞭に諒解せねばならぬ。

◎觀無量壽經に九品の往生を説きてある。是畢竟根機の利鈍、人間の善惡によりて、區別されたのである。然るに聖人は九品の區別あるは、畢竟各自の根機を主とするからである。然るに如來大悲大願は、善惡の業報を區別せず、利鈍の根機を取捨せず、男女老少を問はず、貴賤縮素を論ぜず、各自を憐愍したまふが故に、一た此大悲大願に遇ひぬれば、忽ちに九品の區別を廻へして、同一念佛の眞如門に入るのである。信卷に大願清淨の報土には品位階次を云はず、一念須臾の間に

ならしむると共に、同一佛子として同信兄弟といふ統一を實現さるゝのである。茲に於て世界主義と國家主義と、君主政體と民本主義と、相矛盾せざるのみならず、眞に融和せる大調和を實現し得るものである。

◎近時社會學者がすべての問題を經濟上より解決して、宗教の如き精神的分子を加味することを好まざる傾向がある。是畢竟精神上の満足と與へて、物質的の向上を鈍らしむるものとして考ふるからである。是炎に懲りて膾を啜るの類である。從來宗教の弊として、此の如き消極に安んぜしむるが如き虞なしとは斷言出來ぬ。併是不徹底なる宗教の弊に過ぎぬ。眞の徹底せる信仰に至りては、決して此の如きものでない。寧ろ人生は決して物質にて眞の満足を齎らすものでない。現に日本の社會にても、貴族富者資本家少しも幸福なる生活をなして居らぬ。是精神的の満足がないからである。併精神の満足を得たるものは、物質を輕んずべきでない。精神の満足から、物質の満足も、富の分配も、

資本家労働者の調和も實現し得べきである。近時温情主義の労働問題が不徹底なりと斥けらるゝは、此精神問題に於て徹底せる平等主義に達せざるからである。

◎最後に切言せんと欲するは、世界平等主義とか、四海同朋主義とか云へば、國家の主張など出來ぬことの様
に誤解するものがないともかぎらぬ。例せば日本のマ
ーシャル、カロリン群島占有の主張の如きは、世界主義
同朋主義に反するが如き誤謬を、萬が一にも抱くもの
があれば、悪平等に墮するものである。是即ち泰西思想
が、常に自己を正義なりと主張しつゝ、裏切りつゝあ
る缺點である。眞に徹底せる平等主義は、相對界の人
生に於ては、自己主張をすつることの出來ざる罪惡の
我等たることを自覺して、如來大悲の下に慚愧懺悔す
ることによりて實現さるゝ同朋主義である。商をもな
し、奉公をもせよ、獵漁をもせよ、此の如き罪惡の避
くべからざる我等たることを悲憫まします大慈大悲の
下に、四民平等になるのである。四民階級を打破して

平等となるのではない、四民存在して其儘同朋主義を實現するのである。各自の主張を爲し、利益をも要求せざるべからざることを自覺して、同時に他人の立場をも同様に傾解することになるのである。是に於て國家として主張すべきを主張して、世界の平和を妨げず、個人として要求すべきを要求して、社會の秩序を紊亂せざるものが、眞個に徹底せる平等主義の本領である。

近角常觀著

信仰問題

定價七拾五錢
郵稅六錢

宿業論

一 仙臺第二中學の悲惨なる事件

人生の事何から何まで宿業であるといふと、唯然うした一片の理屈のやうに取り易いのであるけれども、之は實際上能く味はして貰はなくはならぬ。私は今度仙臺求道會へ參つて歸つて來たのである。處が新聞紙上でも御承知の如く
仙臺第二中學の生徒が山形縣藏王山に行軍して起つた悲惨なる出來事に就いて、同地の人々は著しき刺激を受け、それに就きて承はることが多かつたのであつた。それはその日が非常な雨の、寒さ酷びしき日であつた。その中總て九人の人々が、山上て行き迷ひ石室に閉ぢ籠り避難仕て居つた處が、その中次第に劇しき降雪となり、雪の爲に何うにも仕やうが無くなつた上に、一方食物も盡き果て、終に九人の人々が餓死するに至つたといふ出來事である。その事が多くの人々の胸

近角常觀

を刺激し、何時知れぬといふ感じて能く聞いて下された方が多かつたと共に、又その事に關し色々の評論があつて、
一面非難する人は甚だ用意が足ら無つたとか、甚しきは陸軍の人などは實地にその地を踏査して、斯くの如きは専門の軍隊と雖敢てせぬ無謀の企てであつたとか、色々議論も多かつたことであつた。又四人附いて行つた教員の中、一人は一緒に亡くなつたのであるが、遣つた二人の人は、自らも面目無いとて悲み、世間からも辨解するをすら許さぬといふ有様で、その人達の心事に立入つて見れば、不幸なりし學生達の父兄遺族に對し、如何程に心苦かつたことであらう、現に『何故自分達も、他の人々と一緒に死な無つたらう』との愚癡が出て居るといふ有様で、爲に各部に著しき衝動を與へ、色々の議論も多かつたことであつた。併し之

に對し信仰上より考えると、それは成る程『斯うもすれば助つたらうに』との愚癡もあらうし、又『斯うしてゆけばよかつたらうに』の思ひもあることであるけれども、結局皆な後より考えることとして、要するに然らういふやうな出來得無つたことが事實、そうより仕方無つたことが事實故、そこに目を着けなくてはならぬ。それは成る程人間としては、『斯うもやれそうなもの、あゝも出來そうなもの』との非難も出て來るし、又自分としても然らう仕得なかつたことを悲む愚癡の出て來るは最もであるけれども、併し結局何う思つても、その時その場合、然らう出來得無つたことが事實。故に私は今回仙臺に於ては、この事に就き之をあゝ斯う批評してゐるのは、甚だ呑氣な沙汰である。それよりも然らういふ起る可らざる事が起つて來る、そこに氣を附けなくてはならぬことを申して來たのである。殊に今回はこの事に促されて聞きに來られた青年も多つたので、それが一々皆な最なことを言はれる。或は『自分が病身故勉學中に仆れることがあるまいか』とか、『兄弟が皆な仆れた故、自分もそういふことにならまいか』とか。或は『自分は責任上何うしても仕途

ける人の我に對する態度として顯はれて來るのであるも、それが一つ起つて來ると、最早やそれが我々の内界に於ける不平不足の事實となりて、如何にしても取り去ることが出來ぬとなつて來るのである。斯くの如き時に我々は、何事も宿業、因縁、約束と考えて、而も唯徒らに外界の善し惡しを言つてゐることはある。併しそれだけでは何にもならぬで無いかと申すのである。それでは結局自分はよいが外界が可かぬといふ丈けになりて、本當の安心にはならぬ。故に茲をも一步進み度いものであると思ふのである。それは成る程人間故、外界には氣の合ふ合はぬ、色々不愉快な事柄も現はれて來る。併しそれに對して不足言ふとか、隔てするとか、腹立てるとか、それは此方がすること故、——も、一つ言へば外界が如何にあらうが、此方さへ不足起さ無ければよい譯け故、不足が起るはそれ丈け此方にも半分悪い處がある譯けである。勿論皆様の言はれるのは、信仰を聞くとして言はれるのであつて、殊には、聞く程のよ方が言はれる訴え故、皆様の言はれる方に理屈、筋道はあると思ふ場合は多いの

八
げ無くてはならぬのだが、それが仕途げられさうに思はれぬ』とか、一々青年の方としては無理なき惱みてあられたのである。私之に對して『成る程諸君がその如く、斯くあり度い』と望まるゝは最であるけれども、併しその有り度い／＼と望まるゝ方角からは、信仰の話は出來ぬのである。それはあり度いと願はるゝことが、必ずしも出來ぬとも言はぬが、出來るとも言へぬで無いか』と申して、故に之に對する慈悲の御眞意を申述べて來たことであつたのである。

二 唯宿業と考えた丈けでは解決にならぬ
之は斯く我々の外界に現はれて來る事柄が我々の宿業として仕やうが無ければかして無く、内界に於ける我々の心も思ひも、思ふ如くには一つもなりえぬのである。早い話が人に不足思ふまいと思つても、何うしても思ひ止まらぬ。先づ多くあることと言ふならば、問題は自分の方よりも外界の方が先きになつて現はれて來ることが多いのである。例へば今の悲惨なる出來事の如きばかりで無く、外界の我に對する仕打ちが自分に満足出來ぬとか。即ち問題は明に外界に於

である。それは尙も信仰聞く程の方は、皆な理想的に考えて居られるから故、そこになると世間は思惑通りに行かうといふのであるし、皆様の理想、筋道に向はれるの故、世間的に言へば皆様の言はれる方に道理々屈のあることは分つて居るのである。併しあつても結局それが、自分の理屈で、それ丈け向うが悪いと考えて居る段は、皆な同じく考えて居るとなつて居るのである。

三 心が思ふやうにならぬのなり

そこになると私常に思ふのであるが、何うも私の話は、世間と皆様を調和させるよりも、色々言つて偏狭ならしむる方にあるらしい。世間は何うでも斯うでも遣つて行ければよいといふのであるし、皆様のは何れ丈けやれても眞實にやれぬと言つて苦まるゝのであつて、茲信仰、理想を言ふ者程今日世間とよけ調和が出來無くなつて居るといふ状態である。それは世間と向ふ方角が違ふの故、本來調和せぬ譯けである。が併し夫れにしても世間で然うだからとて、此方が不足を起し、隔てをやつて居るのは、矢張り可かぬとなつて來るのである。之は元來

私自身が精神問題として信仰に觸れ出したのが之が本であつたので、いつも言ふ如く私としては、初めは何處迄も眞地目にやり、犠牲的献身的に遣つて居る積りであつたのであるが、處が自分がその如く何程やつても『人はその如く自分に向つて來ぬ、自分のやつて居るのを見て呉れぬ』と、然うした心の状態になりて、段々不足を持つやうになつたのであつた。併し初めの間は、私は然う思うて居る自分が悪いのだとは思うて居なかつた。矢張り人が悪いのだと思つて居た。即ち信者の人が茲に止つて居られはせぬかと思ふのである。それは大低の方が『世間が悪い、併し然ういふ悪い事に遇ふのがそれが因縁、約束、業報だ』と、大低の方がそれで終つて仕まつてあるらしい。處で私の『待つて！』自分は自分を犠牲にしてやつて居ると言うて居ながら、さて自分のやつて居るのを人が見て呉れぬとか、之では自分が何處迄も人の下敷きになつて仕まつばかしてあるとか、斯うした不足の出るは、今迄のが實は人に見て貰ひ度い爲め、人に認めて欲しさが先きになつてやつて居つたからで、こんな心持ちでや

つて居つたのを、犠牲、献身などは言へぬ』と。これは恐らく誰方にも言へんならぬことであらうと思ふのである。私共自分が正義、潔白でやつて居る時に、それは誰に認めて貰ひ度いのか、世間に。——必ずしも關係ある友人、係り合ひの者とかに限らぬ。極めて漠然ながら周囲とか世間とかに見て貰ひ度いの心がある。處がそれが何時迄やりても外界に見て呉れるといふことが無いから、不平不足となつて表はれて來る。するとその心は即ち一個の名譽心、人に善く思はれ度さの心。成る程今迄この心でやつて居て、自分は献身的だの、犠牲的だのと、そういふ思ひて人に向つて居つた自分が悪るかつたと、茲で私は自分の悪しさに轉んで來たのであつた。最も之なども普通に言へば世間に理解され無つたの問題に過ぎ無いのであるけれども、併しそうなる私の不平不足の心、今までのこと取り返し度く思ふ私の心なるものが『成る程この心だもの、今までの事よく出來て居なかつた譯けと、茲で過去も現在も残らずが皆暗黒、残らずが皆自分の悪しさの問題となりて、何程引き戻し度く思つても、

最早や何とも仕て見やう無くなつて仕まつたのである。で先きにも言ふ如く、我々の外界が思ふやうにならぬばかりで無く、我々の心が斯く一分一厘思ふやうにならぬ、といふ、茲我々自己の問題に懸いて來ねば、宿業とある本當の意味合ひは頂くことが出來ぬのである。

四 人生の絶對消極面

それは外界の問題でも自己に響くことはあるけれども、その方はまだ考え易い。一番困るのは『自分が思ふやう人に隔てをせぬやうに仕やう』とか、『人の善し悪し言うて居る可き時で無い。人に係はらず不足出さぬやうに仕やう』とか、そこになれば然うさへ出來れば我々その境遇に於て満足が見出せる譯けなれば、そこになると我々の考は、その一點に集中して居る。而も何程思ひてもその思ひが止まらぬとなつて來るのである。そこがこの話は御一人々々の心持ちもあることなれば、それによくはまるやうに聞いて頂かなくては。成る程手輕に『自分は善く仕て居るのだけれど、人がよくせぬ。併し之も因縁、約束』と、それも一種の見やうである

かも知れぬ。併しそれではいつ迄も自分は善いの人が『悪い』になりて、それで眞の平安が得られるかと申すのである。それは成る程常識上、人が悪しき場合は幾らもある。ありてもその爲め不足が出て此方が苦むとなれば、苦まなければならぬ此方に病根はある譯けである。故にそこに目を着けて來なくてはと申すのである。

マア問題は色々ある。色々に申さなければならぬが、『今自分が病氣、直し度い、親あり子あり、死んではならぬ』の問題となれば、如何にも生命の問題故大問題である。又『自分は斯くさへあれば満足だが、こゝ一つある爲めに満足を妨げられる。之さへ無つたらよからうか』と。この場合には、この一つの爲めに全幸福を碎かれて居るのである。而も何程悶えても、その一つが無くなしえぬのである。又或人は『境遇のことは仕方が無いとしても、如何なる場合にも不足さへ出しさへせねば通れる故、然ういふ風にあり度い』と思つても、そのこと一つがあり得ぬのである。總て我々の問題は、外界と言はず、内界と言はず、我々の斯うあり度い、あゝあり度い迄はあるも、

その先きは皆な行き止つて仕まつて居るとなつてゐるのである。

五 眞の宗教、偽の宗教

そこで皆様に、これは甚だ消極的なやうであるけれども、
「斯くあれがし、あゝあれがし」と、
祈りてゆく處の宗教もある。必ずしも低級なこの世の利福を得ることを祈る教をばかりで無く、自分が長生きして親に仕へ度いとか、友人憐人の爲に斯く／＼盡くし度いとか、但しは神の恵みて正しき道を辿り度いとか、随分美はしき人情の上より尊き祈りを立て、ゆく處の教もある。それは如何にも美はしきやうであるけれども、
それでは宗教にならぬ。それなら人生に持つていつての満足である。それは眞の意味での宗教とはなり得ぬのである。そこは能く見なくてはならぬ。そこになつて佛敎は

連し、頻に之を言うたのであるけれども、合點して貰へぬ。そこで親鸞聖人の

六 善惡宿業

『歎異鈔』十三章に

よきこゝろのおこるも、宿業のよほすゆへなり。悪事のおもはれせらるゝも、悪業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、兔毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。……
我々外界の出来事や、人の我に向ふ態度の善惡が宿業であるばかりで無く、
我々、善き心の起るのも宿業である、悪事の思はれせらるゝのも宿業である、『兔毛羊毛のさきにゐる塵ばかりも、造る罪の宿業にあらずといふことなしと知るべしと候ひき。』そこで或時聖人が
茲が親鸞聖人のスツバリした徹底的人格と、聖人の考へがいつも普通と變りて際どく表はれて來る處である。——唯圓房に向はせられて、
……またあるとき唯圓坊は、わがいふことをば信

一切の法は夢と幻と響きとの如しと覺了して、諸の妙願を満足して、必ず是くの如きの刹を成せん。(大經)

この世は夢、幻、響き。思ふやうにならぬとは、斯く事實に突き當つて仕まつて居るのである。それを。それだからこの上何うか思ふやうに仕てといふことあるべきで無い。それを言うて居ると、その上／＼と何處迄も切り無しに堅に積み立てるばかりとなつて、満足さるゝ時は無いとなつて仕まふのである。又修養立場から言ふても、『人は如何にもあれ、自分は何處迄も敵を愛して行く』——それは善を行ふとしてよくよい。處がそれが實際に出來て満足されるのか。設し出來たとしても、それから來た満足ならば
我は善く出來たの不徹底なる自己満足に過ぎ無いのである。人から意地められる丈け意地められ、忍べる丈け忍んで居て、俺はこれ丈け忍べたといふて居る丈けに過ぎぬことになつて仕まふのである。で總て斯く問題に我々の見込み通りには一つもゆかぬ。卯の毛の先き程も『思ふやうにはゆかぬ』に突き當つて仕まうに決つてゐるのである。處が仙臺で今の悲惨なる出來事に關

ずるかとおほせのさふらひしあひだ、さんさふらふとまうしてさふらひしかば、……

唯圓坊が何でも信じますと申上ると、

……さらばわがいはんこと、たがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領

之が輕き口先きの返事無い。運如上人の弟子が『たとひ近江の湖を一人して埋めよと仰せ候とも、畏りたると申すべく候』と同じで、何んな事言はれてもする氣で申上げたのである。すると聖人は唯圓が一分一厘背かぬ考なることを突きとめたる上にて、
……たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしとおほせさふらひしとき、……如何にも意外なるとだつたのである。反對に生命差出せとの仰せなら、唯圓は差出す積りであつたかも知れぬのであるも、『人を千人殺してんや、爾らば往生は一定すべし。』余りに思ひがけないことであつたので唯圓は、
……おほせにてはさふらへども、一人もこの身の器量にてはころしつべしとおほえさずさふらふとま

うしてさふらひしかば、……………

『得出来ませぬ』と申上ると、

……さてはいかに親鸞がいふことを、たがふまじきとはいふぞと。……………

『すると言ふたから言ふたのに何故せぬか。』成る程爲る積りで申上げたのであるも、出来ぬことが現はれて来たから、妙なことになつて仕まつた。これは私共常に『そうします〜』言つて居るのであるけれども、言ふ通りに事實出来て居るか。爲べきことで出来て居ぬこともあれば、仕てならぬことで仕て居ることもあるのである。即ち『仕ます〜』というたとして、事實斯の通り出来ぬて無いかと、我々のそこを押へる爲に言つて下されたのである。殊に初に幾度も〜念押しして置いて——茲は我々動もすれば何事も宿業因縁と、氣樂に言うて居るのであるけれども、我々の仕無くては立てぬことが事實には出来ぬことが出来て来るのだから、氣を附けなくてはならぬ。て聖人は斯く押えて置いて……これにてしるべし。なにごとこゝろにまか

より見れば『何故もつと注意仕無つたらうか。』況や本人にしては猶更その愚癡が出て来ることであるであらうも、何程思つても取返しがつかぬことになつて仕まつこともあるし、又充分注意して居て犯されて仕まつ場合もある。即ち『あゝ仕て置いたら、斯うして置いたら』それは結局、あとから言ふことであるも、事實としては一分一厘、兎の毛の先き程も我々が思ふやうにはならぬといふことに行き詰つて仕まつのである。て私仙臺では最後にこの『敷異抄』を持出し、親鸞聖人はこの通りに言ひ置いて下さるて無いか。それを皆なが唯學校の失態問題として批評して居るは未だ呑氣な話である。——殊に先きいふ軍人の人達の間には、態々實地を踏査して、企てそのものに斯れ〜の欠點があつたとか、随分種々なる誹難があつた。それはあとから材料を搜して言へば何とでも言へも仕やう。又言ふのもよいかも知れぬも、言ふた處で、本當に眞面目に考へて來れば、事實何とも仕て見やう無い事て無いかと申して、これは昨年夏にあつたことであるも、余りに是非の議論が多かつたから、この事を申して來たのである。

せたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業縁なきによりて害せざるなり。……………汝如何程殺さうと思つても、殺すべき業縁が無いから殺すことが出来ぬのである。

……わがころのよくてころさぬにはあらず。……それを我が心が善いから殺さぬのだと思つたら大變な間違ひである。

……また害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしと、おほせのさふらひしは、われらがころのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることをおほせのさふらひしなり。

すると我々『然う仕ます〜』と言ふも、それは道理理屈から言へば然うせねばならぬことが、それが斯く事實には出来ぬので無いかと、之を知らせるために言うて下されたのである。

七、實例三件
こは此頃は悪性寒胃が流行して多くの人が死ぬ。他

それは昨夏或人が自分の義弟を連れて河へ游泳に行き、あなやと思ふまに、折角支えた手か脱れて、義弟を助けることが出来得無つたのである。その方は『その位なら何故あの時自分も一緒に死な無つたらう。人もあらうに義理ある弟を殺して、殘念に堪えぬ』と、聞きに來て下されたのであつた。即ちその方が義理上それ程に身の置き所もなく思はるゝは最もであるも、それ程に苦まれても何う思はれても、最早やその事が何とも解決の着きやうが無いのである。又反對に或人は自分の子供を某學校に托し置き、——それも態々選りに選んで好いといふ或學校に托して置いて、教員に連れられて海水に行き、終に溺らされて仕まつたといふとがあつたのであつた。てこの方は痛く不自由に考えられ、『人の子を預る教員者とあらう者が、そつういふ失態を仕出して置いて、仕方が無つたといふ丈けてある可き筈が無い。之は一つ先方が衷心悪かつたと氣がつく迄やらなければ虫がいぬ』と、終にそのことを學校監理の地位にある當局に迄持出し、猶ほそれで充分で無いから、刑法上の問題にまで仕やうとせら

れたのであつた。併しそら仕やうとせられる心は、何とかして先方に悪かつたと言はせて満足しやうとせられたのであるけれども、若しや裁判上思ふ通りに先方が有罪となつたとしても、
而も悪かつたと思はぬとすると仕方が無いことになつてしまふと、終に茲に行き詰まりて聞きにお出でになつたのであつた。即ち人を誹難する方、——而も相手
を罪におとして何う斯うといふので無く、唯「何とかして先方に眞に自分が悪かつたといふ丈の自覺を促し度い」と、それまで遣らうとしてもそれが結局行かなくなるのであるし、又自分の義弟を殺して、「何故あの時一緒に死ななかつたらう」それ程に苦みても、それが結局取返しのできやうがないのである。而して昨夏等の問題に惱みておいてになつた方に、話して最も慰安となり、力を興へたことは、昨夏
華原師が自分の長男を、自分の寺の前の小川で溺らし、お助けになるとが出来なかつた出来事である。ほんの少時の間、目を放しておいてになる間にそんなことが出来て来た。「イヤ教育者であらう者が、人の子を預つて置いて、注意が足らぬ」など我々はいふのであるけれど

りも』にしても、これは『俱舍論』に微塵といふこと、物の微いといふことを言ふ時に、兎の毛羊の毛の先きに居る塵といふことが言うてある。即ちそれから言はれたものである。又「人を千人殺してんや」の如き、如何にも出任かせに言はれた言葉のやうにあるけれども、これは昔
印度に或る外道があつて、その者に「殺せよ」といふ上足の弟子があつた。その外道が或ることで弟子の殺せよを憎み、何とかして之を殺さんと、態と邪法を教え、「人を千人殺して来い。然らば汝悟に入ることが出来る」と授けた。すると鴛鴦摩は涙を流して喜んで、師の仰せ通りに眞直に實行することになつて、とうとう街道に出て九百九十九人迄を殺した。終に今一人て千人にならんとする處に最後に佛に出遇つて、佛を殺さうとし、却て自分の間違ひを教えられ、慚愧して救はれたといふ古事がある。即ち人より言ひ付けられて、『その通りにする、せぬ』それも自分の思ひには任かせぬのだといふ例に之を引いて来てお知らせ下されたのである。すると要する處、一分一厘も我々の思ひ通りには何事もならぬといふことである。世間でも、

れども、現に斯く親でもないか。今度仙臺では私之等の例を提出し、『斯く誹難する方からは刑法上迄持つ行ても解決がつかぬのであるし、苦む方でも設を自分の命を差出した處で、何とも仕て見やうか無いのである。最後には斯く無二の愛子をすら思ふやう助けられぬといふことが出来て来る。即ち聖人が
兎の毛の先き程も思ふやうにならぬのが業と言はれたが、茲のことと無いか。それを我々「あゝ仕て置いたら、斯う仕て置いたらと思ふのであるけれども、いかぬ時にはいかぬのだ」とお話して来たのである。

八「人を千人殺してんや」の據所

こは全體『救異鈔』の十三章は、私など之を讀む時に、色々の考が出て来る。「人を千人殺してんや」など、喩えにも事缺いて、こんな事言うて人が聞き違えやせぬかなど、色々に思ふたこともあつた。處が毎に言ふ如く親鸞聖人の仰せられる言葉には、一句一言と雖も據所無きは無い。今の「兎の毛羊の毛の先きにいる塵ばかり

僅か一分間のことで機會を逸したといふことがある。僅か一分間のことで死に目に遇へたといふ方は、それは遇ふ可き縁があつたから遇へたので、そこになると一分も一厘も我々の思ふ通りにはならぬ。こは一面甚だ思ひ切つた斷定であるやうであるけれども、我々の思惑が斯く必ず突き當るばかりで無く、我々の人に對する態度に於ても、必ず思ふやうゆかぬに行き詰るに決つて居るのである。

九「勤けぬが哀れ動かせてやらう」の慈悲心の發動

處で茲が肝腎である。今の一分一厘思ふやうにならぬ、そこを見て下されたのが他方救濟の起る大本である。今分りよいやうにそこを通俗に言ふ。卑近な譬であるけれども、今往來の電車の軌道に人が一人横たはりて、倒れて居たとする。之を見た者危く見て居られぬから「そこ退け」と車掌は車掌で怒鳴り、通行人は通行人で騒ぐといふことになる。それはその者に起きて歩ける丈の自由があると、それになる。處が今何程怒鳴つてもその者が動

かぬは、能く見ると、
 腰が抜けて居て動けぬのであると分ると、何うだらう。
 動けぬ者に、動かぬのがいかぬては意味をなさぬ。自
 分でも逃げ度いのであるけれども、逃げやうにも逃げ
 られぬので困つて居るのである。するとそれを見た者、
 最早や『彼奴、何程言うてやつても動か無いから可か
 ぬ』といふことは無くなつて来る。『成る程動けぬの
 か、動けぬとあれば、動けぬが氣の毒』となつて来る。
 氣の毒となれば、電車の來る儘に捨て、置くといふこ
 とは無い。『サア氣の毒だから、皆な寄つて擔いで退け
 てやらう』乃至『危険を犯しても、助けてやら無くて
 はならぬ』の感情が起つて來るは、即ち
 動けぬのが哀はれ故、動かしてやらうの慈悲心の發動
 である。それと同じで、今
 他力は思ひ切つた絶大の法故、聞き違えがあつてはな
 らぬも、我々の善きをばよしとし、悪しきをば悪しと
 して、
 我々の善惡に従つて、善は取り上げ、悪しきは捨てるは
 普通道徳上の教である。それでは救ひとはならぬので
 ある。今何人も苦んで居るは、善くやらんとして善く

やれず、悪は避けんと欲して惡に落ち、その何とも仕
 て見やう無き、動くに動かれざるそこを見て下された
 方ありて『それは動けぬのが汝の身の上だもの、無理
 なきことである。そこを見た上は
 最早や善し惡しの問題では無い。善くせんとして出來
 ず、止めんと欲して惡の止まらない、その動くに動け
 無い惡業の汝を哀はれに思ふの故、よし
 その汝を飽く迄退けてやらう』の佛の恵みを聞く、即
 ちこれが佛の願と。而してこれを説き下されたが『歎
 異鈔』十三章の精神と、斯ういふことになるのである。
 爾るにこの十三章を、皆なが茲を色々問違えて讀む。
 私など幾年前からかこの『歎異鈔』の講義を書き、而
 も今に濟んで居らぬ。濟まぬは私が怠けるから故申譯
 けないことであるも、而もその間一日と雖『歎異鈔』
 を讀まぬ日は無い。殊に講義も今丁度十三章に入つて
 居るので、讀めば讀む程彌々味ひが出る。人様に話し
 て、人様の感じられるのも最もと、思はせて貰ふ次第
 である。

一〇 『歎異鈔』は正宗の名刀

殊に近頃は巢鴨監獄に參つて、丁度十三章を話して

居る。四人など今の『何程自分が善く仕やうと思つて
 もされぬ』の話は、非常に能く感じる。何故かといふ
 に、五犯十犯と重ねる犯罪人は、最早や自分で善くす
 る氣が無くなつて居るのか。否如何なる者も出獄の時
 は、『今度こそは眞人間になつて、もう來ぬ』て皆な出
 て行くのである。出るとつい悪友に遇ふ、愚圖々々し
 てる中に妙なはめになつて又遣ると、總てかく『仕な
 いで置かう』て皆な仕て居るのである。近頃は隨
 分
 新聞紙上で、斯る處でいふも如何はしき慘酷なる出來
 事がある。常識上では何うしてこんなことする氣にな
 つたか想像もせられぬ位。仕た常人も數日前にはそん
 なとする氣が無つたかも知れぬの故に、これは決して
 道徳上の制裁をめることに讀んで貰つてはならぬが、
 聖人は何うも偉いこと言つて置いて下されたものであ
 る。『人を千人殺してんや』。わが心のよくて殺さ
 れには、また許せじと云ふと
 千人を殺すことあるべし云々。隨分思ひ切
 りて殺さぬのでは無い。殺す可き業縁が無いからだ

何うも一寸讀むと危くして、それ故
 『歎異鈔』は昔から正宗の名刀であるといふ位であ
 る。之を殺せといふ意味に讀む者もあるまいけれども、
 何うも讀むにヒヤ々とする程である。ナニ聖人の心
 では、『殺せと言つたとして殺す可き業無き者には殺せぬ
 し、せなと言つたとしてやる奴はやる。また
 そんなとこに目が着いてあるは、本當のとこへ行つて
 居無いらだ』と。之は今日の教育上でも言へるので
 ある。今日の教育でいふ『善を爲せ、惡をせな』は、言
 はれぬかて皆な知つて居る。知つて、その通りいかぬ
 から皆な困つて居るのである。又十三章後の處にゆく
 と斯ういふお言葉もあるのである。
 持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかて
 か生死をはなるべきや。かゝるあさましき身も、本
 願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。
 さればとて身にそなへざらん惡業は、よもつくられ
 さふらはじものを云々。
 茲になると又反對に、我々如何に惡を爲せ、本願に誇
 れと言はれたとて、身に具へざらん惡業は、仕やう
 と思ふたとて出来るもので無い。私など殺人など如

何に言はれたとて、假にも怖ろしくてやれぬのである。そこになると聖人の指示し下さる處は、總て斯ういふ風に我々の善し悪しは總て之を措いて仕まつて、其善し悪し思ふやうにならぬ、その仕て見やうなさを汲み取り、哀はれみ、あらはれ下されたる大悲の御同情一つをおとき下さるとなるのである。

一一 聖人はお慈悲をお知らせ下さるにしてからが

そこになると第一、この信仰のことを人にお説き下さるにしてからが、我々聖人には人に信仰を得させる獨特の技量でもあられたかに思ふのであるけれども、聖人には人に信仰を得させるなど思はれた氣振すら無し。『歎異鈔』六章には

親鸞は弟子一人もたずさふらう。そのゆへはわがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはこそ、弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御よほしにあづかりて念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはな

はなり得ぬことなるのである。

一二 業とは自分自身の業とのことなり

すると斯く我々の何も彼もは皆な業報で、思ふやうにならぬ丈け仕まひかといふに、否、斯く我々が業報に繋かれ、電車道に横たはりて動け無様であるのが可哀想と、そこを見て下されたのである上は『イヤ業報だからそこに何時迄も倒れて居なくてはならぬぞ、動かうと思ふたらいかぬ、退かうと思ふたら身の程知らずだ』と、そこに彼是れ善し悪し言はれることでは無いのである。寧ろ『動かぬ身であるのに、動けぬとは可哀想と、そこを見てやつたのである上は、その汝を何處迄も見捨ては仕はせぬぞ』と、茲我々の當り前の善悪、善し悪しの所作が、残らず業報であることを哀れみ見て下されたお慈悲故、この度びは何處迄もその者に、我々の善悪を懸け離れ、善し悪しを飛び超えた御眞實にお向ひ下さるとなるのである。併し茲はうつかり聞き違えて、『それだから我々の善悪は、善悪何ちらでもないのだ』となつてはならぬ。善悪は何處迄も肝腎な問題である。

ることあるをも、師をそむきてひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなどいふこと不可説なり。如來よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまうすにや。かへすもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云云。

實に思ひ切り、書いてお仕まひになつてある。全體親鸞に附きて法を聞くと、又捨て去ると「附くべき縁あれば伴ひ、離るべき縁あれば離るゝことのあるをも」である。爾るにそれを皆なが、師によりて安心させて貰つて居りながら、師に背きて去るは濟まぬ、なごいふのであるけれども、第一斯く親鸞が信仰得させたと思ふて居るのが根本的の間違ひだと。而して之が決して謙遜の言葉で無く、現に御子の善鸞上人が聞き違えがあつたとすれば、縁なき處には自分のお子様にするお届けになることが出来なかつたのである。然るに我々は、我が思ふ如くに傳へやう、我が親子、兄弟に、自分の力で誰彼にもと思ふのであるけれども、それは如何程思つても思ふ如くに

けれどもその爲さなければならぬ善悪が、我々その如く出来得無いといふことである。そこは我々自分が喰べられる、喰べられぬ位の話ならばまだよいのであるけれども、實は仕無ければならぬが出来ぬの故、借りた金なれば返さなければならぬの問題である。そこは我々は何處までも義務負うて居る。如何なる方法をも取りて償はなければならぬが原則である。而もその返さなければならぬのが、事實は返し得無いといふ問題である。すると何うなるか。『返せない』と『返さぬ』とは大違ひである。何うも近頃の人の言ふ善悪超絶は、『出来無しのだから仕無』になつて居はせぬか。返すべきを返さずして、『返せぬのだから返さなくてもよいのだ』では意味をなさぬ。處が今他力は何程返さうにも、返し得無い我々なることを見て呉るゝ人ありて、『君、何が捨てゝもこの義理立てねばと苦まるゝのであらう。それが返されぬので困つて居らるゝのであらう。それを見た上は君の返し得ぬが氣の毒……』と。何うも茲で從來兎角『イヤ返さ無いけれども、これが業故、返さなくてもよいのだ』と、これになりて

困るのである。それでは人ごとになりて、自分自身の業にならぬ。自分を離れての業になりて、それなら『これが自分の性分故、せぬとこと思ふても、ひとりて出来てもた』流儀である。故に茲は大事である。兎角私が『思ふやうになら無いのだ』といふと、聞く人が、『ウン、それを我々思ふやうに仕やうと思つて居るのが間違ひだ』と、之が甚だいかぬのである。『思ふやうに仕やうと思ふのがいかぬ』といふたとて、人間が思ひを引込めることが出来ずか。我々が死ぬ時、死ぬのを厭と思はぬとちかうと思ふたとて、それは出来ることと無い。すると返すべきが返せないとなれば、唯々苦しい一方である。爾るにそれを見て呉れた人は、『それは成る程返さなくては、いかぬが原則である。けれどもそのせねばならぬが出来ぬとはさて、氣の毒である。故に我はそこを何處迄見てもやるぞ』と、

一三 眞の同情とは
處で斯く『思ふやうにならぬを見て下さる御同情だ』

色々に間違つて困るのである。最も間違ひ易いのは、元來同情とは精神的事象である。そこになると全體信仰問題とは精神上の問題。そこは佛のお慈悲にして、も心光と申して、心の上的ことである。それを何か外界に光でも見ることに如く考へる。早い話が我々が死ぬとなると暗みである。するとその暗を照す光といふと、何かそこへ光でも来て明くなることのやうに考へる。成る程照すといふ言葉はあるも、それは心の上の形容である。それを兎角外界に何か照はれてもするか、の如くに取りて可かぬのである。

一四 私の行き詰つたのは、そこは毎時のことであるも、私など初めの問題は、『人と融け度い、人を不足に思はぬやうになれるとよ』と、之を望んだのである。處がいつ迄いつても之になれ無つたのである。之は眞地目の方程この苦みがある。それやうと思ふ。何故なら、外界といふものは常に自分を理解して呉れるもので無い故に、何うしても人が不足に思へ、隔てが起ることになつて来る。すると『その如く人を悪しく思ひ、隔

と私が申上げると、兎角聽いて下さる方で取らるゝ同情の意味が、私がいふのと違つて来て困るのである。それは何うしても同情だといはれると、人間の頭に出て来るは、自分の思惑通りに助力して呉れる世間的同情の意味になる。例へば私が長生き仕度い。すると私の思ひを察して、長生き出来る方に努力して呉れるが同情といふことになる。それなら、私から言ふと同情にならぬのである。眞の同情とは、返すべきを私が返されぬとすれば、さういふ不屈さな奴は相手にせぬとあるべきに、『それは汝が返されず、隔ての止まぬのが性格である。その性格を氣の毒といふ以上は、汝が如何に隔てやうが、抗抵仕やうがそれを自分は一點悪しくは思はぬ。益々同情する』と、普通ならば何程此方から並べ立てても、『イヤそんな奴相手にせぬ』とあるべき處に、『イヤ君のそなる處に同情するのだもの、然らなければなる程彌々氣の毒とこそ同情すれ、一點悪しくは斥けぬ』と斯うありてこそ之が同情である。即ち

信仰味の一番重要な一點は茲。處が甚だ分り難い處で

て、居るのが可かの故、此方よりは何處迄も善く』と、私など之に止つたことが半年以上に涉つたのである。處が何處迄いつても之がいかぬことになつて仕まつたのである。それは善くしたれば仕たて、『自分が仕た』といふものが残り、譲つて遠慮すればするで矢張り『自分が仕た』となる。即ち何時迄いつてもこの自分といふものが善くならぬ故、最後には善く仕やうといふ考を断念せなければならぬことになつて仕まつたのである。即ち先きの聖人が、『一分一厘善くなせぬ』と知らして下されたが茲である。當時そこが私の心に響いて思つたことである。『之は飽く迄自分の心の自由といふことが失はれてある。宛然』

黒板上に丸子が置かれてある状態である。一寸一點力が加えられると動き出すことは分つてあるが、その一點が何うしてもいかぬ。『人が何程自分を悪しく思はふと自分よりは思は無い』——これ一つが出来れば、あとは轉々と、自由に動き出すことは分つてあるも、その一つの力が與へられぬから何うしてもいかぬ』と、それでとうとう人に融けやうとすることを断念するより仕方が無くなつて仕まつたのである。するともう仕方が無い、

自分は何處迄も人に隔て、不足ばかり。今迄力を入れて來た自分の宗教上の仕事も總て水泡に歸し、『もう自分は自滅するばかり』との考より外に無くなつてしまつたのである。處が私自分は自滅しても、心が死に切れ無い。最後に『自分はこれ迄努力して、終に駄目になつてしまつたのである。哀れ願はくば自分がこれ程苦みても善くなれ無い、そこを成る程君のは、それ程やつてもいかなかつたの故——いけなかつたのはいかぬと捨てずに、——君のいけ無つたのは察する、悪しくは思はぬ』と、もうこの時結果などを望みはせぬのである。『只これ程自分はやつてもいけなかつたといふ、その汝の心淋き心中が哀はれと、そこを一滴の涙で見て呉れる丈の慈悲者はあるまいか』と。もう茲になるとさういふ同情の恵みが欲しいばかり、さういふ同情があると何うなれるなどいふ結果などは思ひはせぬのである。茲で結果が目に着くのだと、私のいふ意味は理解して貰へなくなる。そこは聖人の仰せにも

地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは……後悔もさふらはめ。いづれの

行もまよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし(歎異鈔二章)

地獄は一定すみかとあれば、もう永劫に浮べやうは無ないのである。即ち茲は、捲土重来などいふ、さういふものゝ無くなりてもた處である。そして唯々『之ほどやつてもいけなかつた、そこを見て呉るゝ者はあるまいか』と、一番最後に残つたものは、これ丈けのものになつてしまつたのである。而して彌々最後に、初めて今迄聞いて居つた佛の恵みなることは、實にこの御同情であつたことに氣附かして貰うた。夫れ迄私は佛の慈悲は『悪しくてもよい』に聞いて居つたものだから、茲に至る迄御眞意を知らして貰ふことが出来無つたのである。

一五 方角轉換の一點

處が何うも説教で佛の本願は『悪しくてもよい』『悪しきなりて』の意味に言はるゝもの故、大低の信者の方の聞き方が、『悪しくてもよい』か、或はそれでは本當の安心にならぬもの故、『悪しくは濟まぬ、善くせぬならぬ』の聞き方か、大低この二種類になりてある。そのそうなるは、

猶ほ自分で動くことが出来る餘地あるものになつて居るからそれになる。處が現に私の如く、ありてはならぬ私の悪しさが止まぬとなると、悪してもよいては安心出來ぬ。悪くては暗黒になる一方になる。併し何程苦心してもその悪しさが取れぬとなるとこの時『イヤ我は取れぬのを氣の毒に思ふのぢや』とある慈悲者はもうその者を何處迄もお見捨て下さらぬ處の御同情である。何うも話がちと緻密になり過ぎる恐れがあるが、設えば我々先きよりいふ、『今死んでは悪い、死なぬやうに仕度い』となると、何處迄も然らぬやうになつて安心仕度い。併し自分は死なぬ者と決らぬから、それでは何うしても安心されぬのである。寧ろさうあらしめ度いと思へば思ふ程、彌々安心がされぬのである。そこは我々如何に信仰は頂かうが、いさゝか所勞のこともあれば、死なんづるやらんと、こゝろぼそくおぼゆることも、煩惱の所爲なり

(歎異鈔)

死ぬかと思へば矢張り心淋しく、心細い。爾るにその心淋しい暗黒に同情して、——寧ろ極言すれば、信仰得たら心淋しくなくなるのだらうと思つて居たに、

反對に信仰を頂いてもその心が止まぬ、そこを見て、それは嗚心淋しからう、力無からう』と、そこへ遣る瀬無き慈悲で向はるゝもの故、そこで方角が轉するとなるのである。今迄は自分が悪しくて可かぬと思つて居たに、茲で方角一轉して、『斯のやうに、何れ丈け努めても悪しさを止まぬ、この止まぬ者故、この奴が哀はれとある慈悲か』と。でその時私は思ふたのである。『丁度、私の苦み惱みのある限り、そこへ丁度一杯に遣る瀬無き恵みて同情して下さる方が佛だ』と。も一つ極言なれども、

『佛の姿、形、抑々佛とは、私共人生苦惱の鑄型の中へ、その苦惱が哀はれ、との大悲の溶液を注ぎ込み、仕方の無い私の全體へ、廣大の恵みを充ち満て、下さる方が佛だ』と、思はして貰ふたことであつたのである。

一六 破闇滿願

そこで皆様が、『佛とは如何』『佛の存在は何うして確めるか』直ぐ之を聞き度がるゝのであるけれども、抑々佛とは、私共人生は様々なる業報、因縁、境遇、

約束、様々なる私共の鑄型はあるが、その各の鑄型の先き／＼迄も、今いふ御察し下さる眞實が行き渡つて下されて、

その眞實の塊なる方が佛である。もう私の兎の毛の先き／＼迄も汲み取りて下されて、何處迄もその私をお見捨てなき御眞實が佛だと。この佛が現はれて下さらぬ限り満足の期は無い。故に、この佛が現はれて下された時が破開滿願。如何なる私の闇はあるも、その闇みのある限り、遣る瀬無く思召し、如何に私の闇みにて妨げやうとするも、此方がそれがある限り、その闇みを照らさうとの御眞實故、即ち無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障ももしとなげかざれ。

併し照されて明くなることに目を着けてはならぬのである。寧ろ私の明くならぬ先き／＼迄も見て下さる御實意である。こは皆様が何か苦きことあると、この苦しいのを信仰の力で苦しく無くならうと思はれると、却つて信仰の道で無くなつて来る。寧ろ我々は苦しい、自分の力でその苦を脱れやうにも、脱がられぬになつて来るの

『この五濁五苦等は、六道に通じて未だ受けぬ者は無い。常に之に逼惱す。若しこの苦を受け無い者は、それは凡夫の數に入ら無いぞ』との言葉である。そこで我々この苦みが無つたらよからうといふのであるけれど、苦が無つたら五濁惡世で無い。そこになると凡夫なる限り苦の無い者としては無いのである。そこで信仰に心懸ける方が、『こんな苦みがあるやうでは、本當で無い。何うかしてこの苦が無いやうになり度い、もつと喜べるやうになり度い、信心頂き度い』と、そう一途に思つて居らるゝ處へ、大悲の仰せは『無明長夜の燈炬なり、智眼暗しと悲むな、生死大海の船筏なり、罪障重しと歎かざれ。』これ聞かれるなり『あゝこの無明だもの、これで何が分るものか、この分らぬ茲を見て下さらうとの思召か』と、之に氣づいて喜ばれる方がよくある。之が決して思ふ如く苦が抜けて、信仰が得られて、安心したもので無い。寧ろ『分らぬ、苦の止まぬが凡夫』と、而して『意外にもこの苦を見て下さらうとの御眞實か』と、茲へ出て初めて安心させて貰へたものなのである。

である。その脱がられぬ苦しきを見て、『苦しからう、惱ましからう』とあるお恵みである。故に我々の苦しきを、直にそれも恵みとすると間違ひになつて来るのである。

一七 『凡數の攝に非るなり』

そこで申すのであるが、『觀經』で韋提希夫人が七重の獄に入れられて苦んだ時、釋尊が降臨して韋提の爲めに、諸佛淨明の國土を觀せしめ給ふた時、韋提が申上げた言葉に、世尊我如きは今は佛力を以ての故に、彼の國土を見たてまつる。若し佛滅後の諸の衆生等は、濁惡不善にして五苦に還られん、云何してか當に阿彌陀佛の極樂世界を見たてまつるべきや。

『未來の衆生は五苦に還られ見ることが出来まいが、如何がして見奉りたら宜からうか』との意味の言葉なのである。それを善導大師が解釋せられた言葉に、此の五濁五苦等は、六道に通じて受けて、未だ無き者は有らず、常に之に逼惱す。若し此の苦を受けざる者は、凡數の攝に非る也。之が非常に味ひのあることと思はして貰ふのである。

一八 『われらは生死の凡夫か』

爾らば何時迄も苦が取れずに、苦しみて居るのが信仰かと。否。その苦の取れ無いのを『佛兼ねて知召し、煩惱具足の凡夫』とそこを見て下さるが恵み故、そこになると、私の苦しい丈け何處迄も見て下さる處の慈悲である。當り前ならばそんな奴はいかぬと捨てられべき處に、イヤ然ういふ何程善く仕やうと思ふても、善く爲せぬ。避けやうと思ふても境遇が避けられぬ。その苦の止まぬを飽く迄遣る瀬無く言ふて下さる同情故、この苦の者がこの超世無上の同情の聲を聞かして貰ふと、その者が超世の悲願さしより、われらは生死の凡夫か。有漏の穢身は變らねど、こゝろは淨土にすみあそぶ。之が先きの『凡數の攝に非るなり』と同じである。同じ言葉で兩面に言ひて、苦が止むのなら凡數の攝に入らぬ、その苦の止まぬから煩惱具足の凡夫と。而してそれを再び反して、その苦の止まぬを見て、苦の有る限り遣る瀬無く言ふて下さる大悲である。即ち私が先きいふ、如何にしても人に善く出来ぬ。出来ぬ以上は總てに斥けられて、誰一人手頼る者が無い處へ、『その善

く出来ぬ汝が哀はれと見た上は、誰一人見て貰へる者
無い汝の淋しさは何處迄も察するぞ、見てやるぞ」と
ある御同情が超世の悲願である。恰も氷があればある
限り水になすが日輪の光である如く、我々の五濁五苦
の多ければ多き程、何處迄も哀み見て下さる處の大悲
である。この極り無き大慈大悲に遇へば、如何な苦惱
の私もその一念にその御眞實の程に満足させられて、

『超世の悲願さしより、
われらは生死の凡夫かは』――全體この

『帖外和讃』は、人によりて疑ひを入れて、聖人の直作
で無いといふ説もある。それはこの『帖外讃』九章は後
になりて發見せられたもので、故に果して聖人の直作
か、少くも御入滅後近い時代に出来たものだらうと思
ふのである。それは調子に於ても他の和讃と一寸變つ
て居る所があるし、今一つは

『聖人は喜ぶ方よりも、喜ぶぬを見て下さる御眞實の方
で多くお示し下されてあるのである。爾るにこの『和
讃』は如何にも喜びの著しきもので、――併し聖人は

晩年になる程、お喜びの方がよければ居るのであ
る。併しそれは兎も角、そらいふ苦惱の止まぬを哀は

ふ。煩惱を具足せる凡夫人、佛願力に由つて信を獲
得す。斯の人は即ち凡數の攝に非ず。是れは人中の
分陀利花なり。斯の信は最勝希有人なり。斯の信は
妙好上人なり。

之には、今の『其苦を受けざる者は凡數の攝に非ず』の
方が、『煩惱を具足せる凡夫人』になつてあり、『生死の
凡夫かは』の方が反對に『凡數の攝に非ず』の方に言う
てある。即ち何時でもこの兩面に表はれて来る。之が矛
盾したる兩面無く、寧ろ
信仰味の兩面である。この水差の蓋が身に合ふは、身
に合ふ蓋だからである。身の方よりいふと、この苦の
止まぬ身。それを丁度それに合ふ丈け飽く迄哀れむ蓋
の慈悲頂けば、その身が最早や永劫にその蓋の慈悲と
離れざる仕合せの身なのである。我々は何處迄も煩惱
具足の凡夫人、爾るにその私の暗黒、苦惱、不足、缺
陥、永劫に望み無き私を、その暗黒、苦惱の故に飽く
迄同情し、お見捨て無き御眞實、その思召を頂くと、
この私がその思ひがけ無き御恵みに預かられた一つで
『人中の分陀利華なり』。この私が『生死の凡夫かは』。
爾るに何かお慈悲を苦を無くする手段の如く考え、終

れとの大悲の御眞實を聞くと、その者が『超世の悲願
さしより、我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はか
はらねど、心は淨土にすみあそぶ』と、宛然苦を受けざ
るものは『凡夫の攝に非る也』とは、掌反した言ひ方な
のである。而して

『誰一人見て呉れる者無く、皆
之が決して矛盾で無い。誰一人見て呉れる者無く、皆
なに呆れ果てられて仕まふ淋しき心中に、その仕方の
無い者故にその汝が哀れとの御眞實と、之を屈けら
れて見れば、實に是れ程嬉しいことは無いのである。
それは茲に砂糖水の旨いのと、又茲に到底助らぬ病人
の處へ、『もう到底いかぬが、唯一つ自分に考がある。

何處迄も引受けたから』と言はれて有難いのと、有難
さが違ふのである。我々煩惱起り、如何しても苦の止
まぬ。爾るにその苦の止まぬ故、その私の身をそれ
程に哀れみ思召す、その御眞實味ふと、如何にも我が
身にとり世に絶えたる御慈みにて、『超世の悲願さし
より、……心は淨土にすみあそぶ。』――猶ほ之と同意
味の御示しは『二門偈』にも在る。

釋迦諸佛は是れ眞實、慈悲の父母なり。種々の善巧
方便を以て我等が無上の眞實信を發起せしめたま

には極樂行きの道筋の如く考えるから、非常な間違ひ
となるのである。

一九 自然法雨の生活

そこで昨年刊行の私の『慈光録』に、
『自然法雨は信仰圓熟の極致也』の一文、あれは彌々
この
恵みに安じた人生々活を書いたのである。我々斯うや
つて生きて居る、この生活自身が直に恵み、慈悲と、外
界を攫えて言ふのでは無けれども、人生斯く一事とし
て思ふやうにならぬ、この仕方の無きを憐ませ給ふ御
眞實一に満足させて頂けば、人生の事は如何にあらう
が、自分の計らひは残らず打ち棄て、思召一つに打
ち任かせて、安心して暮させて貰へるが
自然法雨の生活となるのである。又そこにゆくと
思はざる處に恵みが現はれて下さることを屢實驗する
のである。併しその中からも、決して
思ふやうになる方を恵みと喜ぶことに思ひ誤つてはな
らぬ。都合好くなるを恵みとする時は、ならぬ時は不
足に思ひ易い。なるを喜び、ならぬを泣くにあらず、
善さも悪しきも仕て見やう無きを、何處迄も遣る瀬無

くのたまふ御眞實一つに腹ふくらせて貰へたが、お慈悲に夜を明けさせた貰ふた味ひなのである。そこは『歎異鈔』一章に

本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善なき故に。悪をもおそるべからず、本願をさまたぐるほどの悪なきが故に。

又『口傳鈔』には、

上人親鸞おほせにのたまはく、某はまたく善もほしからず、また悪もをそれなし。善のほしからざるゆゑは彌陀の本願を信受するにまされる善なきゆゑに。悪のをそれなきといふは、彌陀の本願をさまたぐる悪なきがゆゑに。云々。

即ち唯遺るは佛の本願、恵み、思召、親心、光、眞實、唯そののみとなる。この外に、『斯うあつたら』、『あゝあつたら』といふも、この恵み以上の善なるものはあることが無い。それは成る程長命も結構であるも、その結構は絶対の結構で無い。善きあとには必ず悪しきが來りて、我々の善きは限りのある善いである。寧ろ私の善くあり得無いを

見て下さる佛の恵みを頂く、これ一つが、最も善いとなるのである。そこは一度び日輪が上ると、群星總て光を失して唯日輪のみ明かなる如く、この世の善し悪しは總て意味を失つて、唯御慈悲一つが有難いとなるのである。

一九 善いこと仕やうとせぬのか、否

そこでこれは誤解の無い爲めに極言する。信仰の生活に於ては、善いこと仕やうとせぬのぢや、と思ふと、これは大なる間違ひである。私は寧ろするのだと言ふ。併し仕ても、仕てる氣でするので無いと言つた方が更に適切である。處が斯れ言ふと、あゝ『然うか、善い事するののか』と直ぐこれに取られて困るのである。昨日も或人に私の苦しんだ時の話仕て、『私の苦しんだのは、人に隔てを取り度い、仲よく仕度い。それに苦しんだのであるが、何うしてもその隔てが止まぬ、仲よくされぬ。處が最後に、その止まぬを見て下さるお慈悲で安心さして貰うた』と、斯くいふとその方は、『あゝ、然うか、先生は何うも偉いことを思つたものである。何うも先生のと我々のとは違ふ。先生のは自力の善位

ひはやつた上の煩悶』と、妙なことに思はれて仕まつたのである。全體私が人と和がうと苦しんだのを、善と思はれるのをかしい。全體私は何に苦しんだか。人に隔てぬやう、仲よくされるやうと言ふと、何か人に仕てやる方の如きも、實は人に善く思はれ度い爲めである。此方からさへすると、人も善く思うて呉れるからと。而して信仰に氣附かして貰ふ迄は、それが何か善でもあるかの如くに思うて居つたのだから、善いこと仕やうとして出来なかつたといふ言葉を用ゐて申して居るのである。成る程それは此方から善くすれば、人も善く我に向ふ。而してそれが善因善果惡因惡果の因果の道理であるかに思うて居つたのであるけれども、考えて見るとこの因果が甚だ可笑しい、利益主義である。之では因果の道理を明らめたとはならぬ。併し夫ても悪い事すると悪い報ひがある、故に悪いことせぬのは因果で無いかと。ナニ信仰からいふと悪くなるのが怖ろしいから欲張つて居るに過ぎぬのである。夫ては因果の道理が分つたとはならぬのである。爾らは何うなつたのが分つたのか。成る程この恐ろしき不足の心である。之て

向へば人が不足に思つた筈、成る程因果應報と、これになつたのが初めて本當に分つたのである。それは成る程『此方から善くすれば、人もする。故にせねばならぬ』は何事も自分の自由に出來る人の立場であるところになる。處が御同やうはそういふて居て、自分に恐ろしき因のあることを自覺仕無い。處が一度びその思ふやうにならぬ仕方なさを見て下さるお慈悲に腹ふくらせて貰へば、成る程この仕て見やうなき惡業の身であつたもの、惡の止まなかつた筈、止まぬ者と、これが初めて本願に乗托して自分の因果を分らせて貰つた味ひである。因果に暗からずは、茲て初めて味はせて貰へるのである。

二〇 業に罪を負はせて平氣で居る

これはお慈悲を知らせて貰ふ迄は仕やうの無いもので、私など苦しんだ時は、自分は善くせんとするのだけれど、如何せん人が我に善く向はぬから出來ぬと、出來ぬ因は人にある如く思うて居た。此間も千葉に參ると或人の話に、或る醫師が無免許で治療して居たのを検事が告發して、終にその醫師が入監仕なくてはな

らぬことになつた。するとその醫師が獄中で毒を飲んで死んでしまつた。まだ苦しんで居る時に一順査が行つて、『何故死ぬやうなことを仕なくてはならなかつたか』と聞いたら、その男は『貴様達が告發したからだ』と答へた。何うも人の死なんとする時言ふこと善しといふけれど、最後迄ひどいこと言ふ奴があると話された。ナニ私共
慈悲が分る迄は皆な之れなのである。『此方は解け度いだけれど向うが打解けんから、向うが善くせぬから』と、何處迄も原因を人に歸して行く。設えは西歐の戦亂にしてからが、『此方は止め度いだけれど、相手が止めぬから』と、處が結局はそれ故
いつ迄も止められず、言うてる自分が不足しまひて畢らねばならぬことになる。處が意外にも豫てからそこを見て下されて、その止められぬは、
それは汝の性である。故にその性分の汝が可哀想なばかりの我が親心ぞ』と、これ知らされると初めて
我が身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より以來、
常に没し常に流轉して出離の縁あること無しと深信す。

二一 本願と宿業

それ故初にいふ『歎異鈔』十三章書き出しの文には彌陀の本願不思議におはしませばとて、惡をおそれざるはまた本願ほこりとて、往生かなふべからずといふこと。この條本願をうたがふ善惡の宿業をこゝろえざるなり。
これは彌陀の本願不思議の故に、
何處迄も我が身の惡しさを氣にせなといふが眞宗の本當の信仰である。處がそれを攫えて、そういふて居るのは本願誇りだと言ふ者がある。そんなこと言ふて居るのは、本願を疑ふ善惡の宿業を心得ぬからだとの言葉である。處て茲の『本願を疑ふ善惡の宿業を心得ぬ』とあるのが、即ち
本願が分らぬのが善惡の宿業が分らぬのだからである。本願が分ると宿業は分る。爾るに多くの人が慈悲は分らなくても、業は分る氣で居るのがいかぬのである。早い話が女中か何か過つて茶碗を破る。『何故そんなこと仕たか。何故そんな過失したか。』と、餘りひどく言はれると、『誰だつて破らうと思つて破つた者があるものか』となつて、『惡うムりました』と言へ無く

『成る程これが自分の性だつたもの、人に不足の止みやうは無つた筈である。この性で人に向つて居たのだもの、人も不足に思つた筈。成る程これは恐ろしい自分の業であつた』と、茲て
初めて我が身の業が分るとなるのである。處が大低の方が『之も前生の宿業、因縁、約束だから仕やうが無い』——そう言うてそれで業が分てる積りで居らるゝは大間違ひである。業は誰れの業かといふに、自分の業である。昔からよく『我が身の業の表はれが耻かしい』といふ言葉があるは、自分の業だからである。それをよく信者の人など、何か悪いことのあつた場合などに『之も業のなしわざだから仕方が無い』と投げやつて居るは、
業に責任を負はせ、業に罪を歸して、突きやつて置くものである。それでは業が分つたにならぬ。業は私の仕方の無いのが私の業であることを哀はれみお見捨て無き御眞實に、終に此方が畏入り満足さして貰つて、成る程仕方の無い私でありましたと、頭の下つた時が、初めて吾が身の業の程が分らせて貰へた時なのである。

なつて仕まふ。處が『イヤ大切の茶碗だけれど、併し誰だつて壊すことはある。そう言ふ自分が折々壊す。誰だつて破らうと思つて破る者は無いのだから』と、そこを見て言うてさへ貰へると、『イヤ私が過失を仕て惡うムりました』と頭が下る。同やうに我々『恐ろしい自分の業であつた』となるは、その業を見て下さる慈悲が無くては、我々初めから諦めは出やせぬのである。我々自分の思ふやうにならぬを何處迄も遣る瀬無く見て下さる慈悲の故に、終に此方がその御眞實の程にほだされて、如何に我慢な私も終に我慢の角が折れ『あゝ何處迄も恐ろしい業の自分であつた』と分るのである。故に慈悲頂く迄に我々が思つて居る善惡因果は、それは何處迄も結果目當て。故に眞實この慈悲で満足させて貰うたて無い限りは、假令念佛稱へやうが、佛にすがらうが、そうして極樂に往かう、心安く居やうの信心であつて、故に之を
罪福信といふ。即ち罪あれば禍を得、善くすれば福を得る、故に善く仕てよくならうの信心である。故にこの絶對の恵みに夜が明ける迄の信仰は、皆な罪福信である。そこになると我々の修養といふことにして

も、成る程自ら善くならうと努めるはよいやうであるけれども、その目的は矢張り善くして善く思はれ度いになる。それは自ら意識して居るか、居ぬかはあるも結局の處はそこになる。處が人間はこの外に考の出やうが無いから、何人、皆々之でやる。やりた結局は終にその自力で行き得無きことに突き當りて、而して茲に意外にもこの仕やうの無きを何處迄もお見捨て無き御眞實に遇はせて頂いて見れば、我々が善したから善い、せぬから悪い、念佛稱えるから善、稱えぬから悪と、そんなことに係はるゝ慈悲に非ず、何處迄も私の

國際的懺悔と宗教的自覺

今や世界平和の問題は、講和會議上の事實として、世界各國の代表者によりて、現實に討議さるゝの運びに至つた。由來國際問題に於ては人道正義の觀念よりも利害得失の點より凡ゆる商議が講ぜられ、講和も同盟も戦争と等しく利害關係を離れては存在しなかつた、

平和が確立され保證され得るであらうか。若しかく豫想するものがありとすれば、それは餘りに樂天的夢想家ではあるまいか。されば一方に於ては盛んに正義人道の高潮せらるゝに係らず、現に事實に於て、各國の提議主張の間に様々の矛盾衝突が現はれてある。各國が自己の立場を主張し、自國の利害得失を離れ能はざる限り、これ亦止むを得ざる事と言はねばならぬ。例へばあれ程にウイルソンが世界の平和正義人道を説くと雖も、彼は決して自國の主張アメリカの立場を離るゝ事はない。ロイドジョウチは軍備問題に於て陸軍徴兵の非を言ふとも、海軍の事は言はぬ所は確に此の爲めであるとは見られまいか。伊國はアドリアチックの問題に佛國と衝突し、其他海洋自由の問題にしる、植民地の問題にしる、最後に國際聯盟の問題にしる、各國は到底公平無私に自國の立場を離れて討議する事は出来ぬ。殊に國際聯盟に於て猶ほ且つ最後の制裁力を設けざるを得ないならば、其處に永久の不徹底が存在する

善し悪し思ひに任せぬ仕て見やう無きを哀れみお見捨てなき御眞と、その者が之に満足させて頂いたのが彼開滿願。而して之を知らして貰うて見れば、成る程この仕やうの無い自分の身であつたものと、兎の毛の先程も思ふやうにはならなかつた筈と、之が分らせて貰へたのが、宿業が知らせて貰へたのである。聖人の常の仰せには

そこばくの業をもちける身にありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願の忝けなさよ。

と。よつて宿業論を話させて貰うたのである。(已上)

然るに今次の講和會議に於ては世界永遠の平和の爲めに、國際問題を自國の利害得失を離れ、廣く正義人道の基礎の上に立ちて、解決せんとする氣勢が漲つて、世界は今や眞の文明の轉機に面して居るかの様に見える。併し乍ら今次の講和會議に於て、果して世界永遠の

ではないか。抑々獨逸に對して自國を主張する國家である限りに於て、假令今に及んで世界の平和を説き正義人道を高唱するとも、各國は遂に争ひの動機を失ふ事は出来ないのである。争ひの世界に於ては、勝てば常に官軍で通る、ウイルソンも戦つた、而して戦に勝ちて今日を得たのである。此點に於てブライアンの非戰論に對して、實際家として勝利者であるだけ、事實に於ては一種の軍國主義者たるの非難は免れぬ。されば假令今次の講和會議に於て世界の平和が得らるゝとも、これは決して永久の平和であらうとは信じられない、何れは武装の平和である。たとひ武器の戦ひは行はぬとも、各國はなほ何物かに關して戦ふであらう。經濟問題もあれば思想問題もある。到底一切の區別を撤して、人種、宗教の區別をも超えて、徹底的に人道主義、同胞主義を實現する事は不可能である。

宗教の眞髓は平和主義である。然るに歐洲戰亂の間にあつて此修羅場を自撃しつゝ、宗教は何事を爲し得

たか。戦争に對して平和主義の宗教が何程の力をも現はし得なかつた事は確に大恥辱である。由來西洋の思想宗教は自我主義の意識と密接に抱合して居る。正義の概念も此自我主義の意識を脱する事が出来ない。ル・テルの宗教改革に於ても此事が現はれて居る。これは西洋文化全體に亘りて貫ける、一つの著しい特色であつて、今ウィルソンの人道主義が最も好く此事を現はして居る。ウィルソンは如何にも眞面目に正義を主張するが、彼世界の禍源たりしカイゼルとても、自分では矢張自己中心の正義を把持して居つたであらう。彼は黃禍説を敢てする一種の狂的人物である。今幽閉されて居て熱心に宗教的冥想に耽つて居ると傳へられて居るが、カイゼルにはカイゼルの宗教觀があつたであらう。今各國が主張しつゝある博愛といひ正義といひ、斯く自己主張、抵抗意識を背景とせる限り、所詮は戦ひの宣言に外ならぬ。

併し乍ら宗教の正義は——宗教的信仰の正義は斯様

な争ひの意識、即ち自己主張を含むものではない。さうあつてはならない。自己主張を自覺し、大慈大悲の絶對に融合され、攝取さるゝ所に、甫めて眞正の正義は生れるのである。此處に最も重要な問題が存する。素より自己主張は到底絶對の撤廢は出来ないものである。人間はそれ程罪惡の塊なのである。けれども此の事を眞に自覺せしめられ、而して此の罪惡の塊が懺悔によりて絶對の大慈悲に融和せらるゝならば、其處で始めて文明の轉機がある。新しき文明の生活、眞の平和の生活が開始される。

世界を永遠の平和に導かんとせば、各國が此の眞正の文明の轉機を通過し、各國をして精神的轉換の實驗を受けしめねばならぬ。各人が自己の罪惡を自覺する如く、國家は自國の正義のみを固執する事なく、人種宗教の區別を去り、他國の立場を認むる精神的基礎を自覺する必要がある。要するに各人各國家が宗教的信仰の精神基礎に立たざる限りは、眞の平和主義、四海平

等主義の實現される事は不可能である。眞の平和は精神的轉換を経なければ到底望むべくもない。新文明の曙光を仄めかしつゝ、世界各國の代表者によりて華々しく開かるゝ今次の講和會議の大舞臺を想像して、吾人は痛切にこの事を思ふ。即ち各國家は國際道徳論より更に一步を進めて、眞に人類永遠の平和の爲めに、國際的信仰國際的懺悔の精神轉換をうけねばならぬ。眞の文明は單に學術の進歩、富の増大、機械の精巧ではなす。

國內に於ても今後は物質上並に精神上の様々の問題が起るであらう。既にデモクラシーの問題、勞働問題等がある。これ等に對しても眞の信仰的宗教的自覺といふ精神的基礎の上に立たざる限りは、徹底的の解決は望まれない。眞に文明の轉機は根本的には宗教的自覺以外の何物をも意味しないのである。

最後に一言附記しておきたい。私が最も注意したいとは、各個人が此根本的罪惡自覺によりて精神的大轉

換をなすことが、新文明の轉機であるといふ事であるが、併し各人は全く自己主張を捨てよといふにあらず、寧ろ自己主張を捨つべからざる相對的の罪惡の人生たる事を自覺反省して正義人道を標榜して自己利益を主張するの非を悟るべきである。恐くは此度の平和會議によりて、ウィルソンを初めとして世界の理想家が、必ずや其實現の困難を感じ、人も恐くは其期待の空想たりしことを自覺するであらう。私は寧ろ此點に於て、人類全體が大慈大悲の前に求哀慚愧すべき精神的大轉換が必要となり、國際問題のみならず、社會問題も勞働問題も、最後の行詰りは此精神的轉換によらざれば、徹底的解決は不可能也と斷言するを憚らぬ。



新刊廣告

近角常觀著

慈光錄

求道叢書
第一編

定價八十五錢 郵稅四錢

●本書は『求道』第一卷及び第四卷に掲載せる著者が力作十一編を選びて収録刊行す
●蓋し一念徹底の信源より顯現し來る實際生活の内面的風光を告白描寫せるものにして、著者が筆になるものとしては、これ迄に表はれたる中の最も心力を傾注せる文字なり
●猶ほ加賀國專光寺所藏親鸞聖人眞筆聖德太子二十句偈文を原本大コロタイプ版に附して冠頭に添付したり

●本所は求道讀者諸君に限り何種にても御便利集金郵便の注文に應ず

求道發行所

本郷區森川町一
東京一六六九六番

求道第拾五

大正七年三月八日第三種郵便物認可
大正八年二月十五日發行(毎月十五日發行)

講 話

每日曜午前九時 每月十五日午前九時愛信會
每土曜午後七時 每月廿八日午後七時鸞聖會
求道會館
(本郷區森川町一番地)

每土曜午後二時

第二 求道會
(九段坂佛教俱樂部)

每月二十七日午後七時

第三 求道會
(日本橋彌生町説教所)

每日曜午前八時

日曜 學校
(求道會館)

●本誌は毎月一回十五日發行とす●誌代は總て前金御拂込のこ
と●送金は成るべく振替にやられたし●郵便爲替の場合には振替
局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は一割増●宛名人は凡て
求道發行所のこと

定價一部十四錢 六ヶ月分 八十錢 (郵税不要)
三ヶ月分 壹圓五十錢

大正八年二月十二日印刷
大正八年二月十五日發行

發行所

求道發行所

電話(小石川一六四一番)振替(東京一六六九六番)

發行所
編輯人 近角常觀
印刷人 白土常音
東京市本郷區森川町一番地